

— はなわさんの家族はTVで視ていて、とても仲がよい。結婚して良かったと思うのはどういう瞬間か？

はなわさん 結婚して18年目ですが、うちは子どもを幸せにする、ということテーマにしているんです、子どもが笑顔になったり頑張っている姿が見られるのが一番幸せです。「佐賀県」が2003年にヒットしまして、その歌のおかげで今の自分があると思っています。佐賀のみなさんにすごく迷惑をおかけしてしまって(笑)。一生をかけて佐賀県に恩返しをしたいというのが家族のテーマでもあります。うちの嫁さんも佐賀市出身で中学校の1学年先輩です。今から8年前に佐賀に戻ってきました。ずっと嫁さんが佐賀で子育てしたい、と言っていたので、長男が中学校に上がる前に決断しました。佐賀に住んで、佐賀のプロモーションに関わらせてもらっていますし、いろんな番組で佐賀をPRさせてもらっています。長男は小学生のときに柔道で全国3位になって、高校も全国からスカウトが来たんですけど、長男が自分から「うちの家族のテーマだから佐賀の高校に行く。佐賀から日本一になりたい」といって地元に残りました。

— はなわさんは仕事を含め、いろんな披露宴に招かれると思う。

はなわさん 2017年に「お義父さん」という、嫁さんに贈ったノンフィクションの歌を作りました。ユーチューブで20日間で100万回再生を記録してレコード大賞企画賞も頂いた。その曲が出てからいろんな結



婚式で歌ってくれという依頼がかなりあります。結婚式は一生の思い出になるので、普通の営業よりも気合を入れていきます。事前に新郎新婦の情報ももらって、式場の担当者さんとも一緒にかなり打ち合わせして、その結婚式のためだけの替え歌を作ったりします。

実は僕らは結婚式を挙げていないんですよ。経済的に厳しくて。弟であるナイツの婿が結婚するときに、同じ芸人という道に進んで結婚式してくれたのが嬉しくて、式で一曲歌うときになって、マイクの前に立つたら、なんか知らないけど、号泣しちゃって、しゃべれなくなっちゃいました。おぼんこぼん師匠に「頑張れ兄貴！」とか言われて(笑)。なんか嬉しかったですね。

— 佐賀の披露宴の特徴は？

はなわさん 結構人数が多い気がしますね。森奈織子・ゼクシィ編集長(以下「森編集長」)九州全体もそうですが、佐賀も多いですね。東京とかだと60-70人くらいですが、佐賀は100人近く出席されます。親戚だけではなくご近所の方まで参加してもらうこともあるようです。人との付き合いやつながりを大事にする、という結婚式の本質を守っている地域だと思います。

— 特に佐賀の文化を感じさせる部分は？

森編集長 お茶講ちやこうという風習がありますよね。みなさんがされている訳ではないと思いますが、ご近所の方を招待する。結婚は親御さんもそうですし、親族やご近所さんとか、ふたりのいろんな「応援団」を作る場だと思います。そういうお付き合いが圧倒的な味方



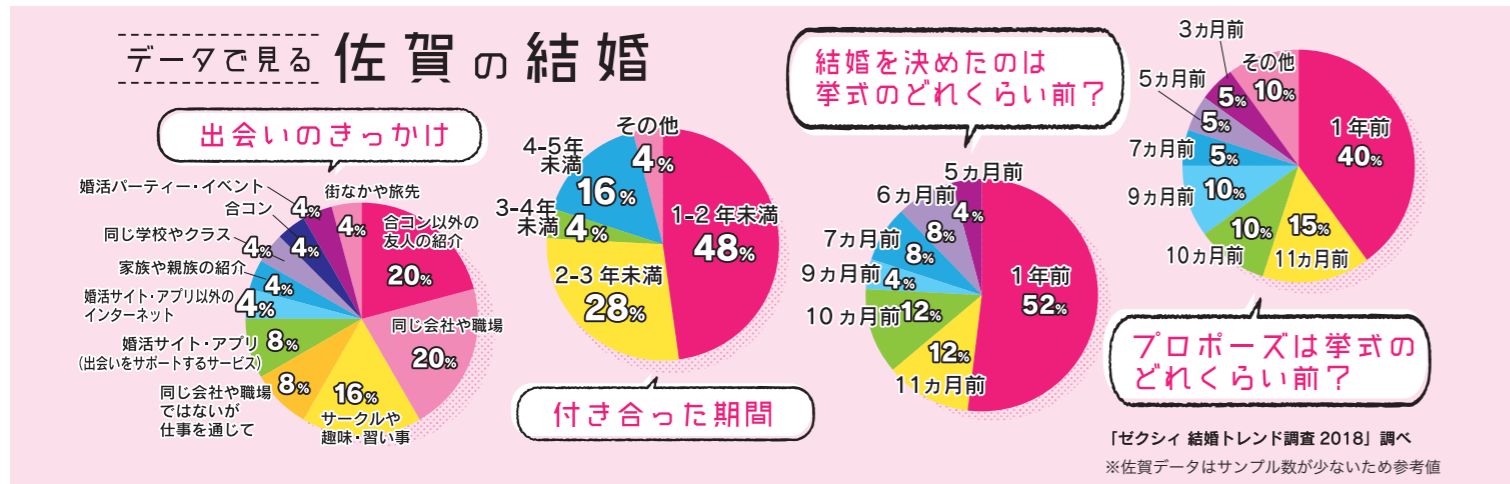
## ウェディング特集 取材協力：ゼクシィ

# 特集 結婚式は大事です!!

ブライダル情報誌「ゼクシィ」とMOTEMOTEさがによる特別企画が今月号からスタート。新鮮で幅広い結婚情報を佐賀のみなさんに提供することで、佐賀の結婚が決まったばかりの幸せなカップルのみなさんに、より幸せな結婚生活を送られるようサポートしていきます。

この画期的な特集を記念し、今月の特集では「ベストファーザー」に贈られるイエローリボン賞の受賞経験がある県出身の芸人はなわさん、昨年結婚したばかりの山崎さん夫婦とその両親、ゼクシィ編集長・森奈織子さんによる座談会を開催しました。結婚式にまつわる思い出や佐賀の婚礼の特徴、そして結婚式の意味など、自由に話してもらいました。

(聞き手 本誌発行人・橋詰空)



## 披露宴は「応援団」を作る場所 ゼクシィ 森 編集長

森編集長 結婚式でしか見えない景色がありますよね!!

夏実さん 一生に一度のことなので、結婚ができるなら、形はどうであれ式を挙げたいと思っていました。お金がかかるものなので、やりたくてもできない方もいらっしゃると思いますが、「無料でできるよ」と言われたら、何度でも挙げたいくらい楽しかったです。ずっと良くしてくださいな方が一堂に集まる機会ってなかなかないので。あとは葬式くらいでしょう(笑)。

「結婚式を挙げないという選択もあると思うが、なぜ結婚式をするかを選んだのか?」  
健さん 主役はもちろん奥さんなので、しなやかな選択肢はありませんでした。  
はなわさん 奥さんはやりたい気持ちはあった?」  
夏実さん 一生に一度のことなので、結婚ができるなら、形はどうであれ式を挙げたいと思っていました。お金がかかるものなので、やりたくてもできない方もいらっしゃると思いますが、「無料でできるよ」と言われたら、何度でも挙げたいくらい楽しかったです。ずっと良くしてくださいな方が一堂に集まる機会ってなかなかないので。あとは葬式くらいでしょう(笑)。



## 式挙げなかったこと 心底後悔 はなわさん

はなわさん 式が終わってからは、披露宴やって楽しかったな、やって良かったな、としみじみ、頭に墨付けて字を書いたりとか...  
健さん アピールしようかなと思って...  
泰介さん 式が終わってからは、披露宴やって楽しかったな、やって良かったな、としみじみ、頭に墨付けて字を書いたりとか...  
はなわさん ユーチューバーなんですか?」  
健さん アピールしようかなと思って...  
泰介さん 式が終わってからは、披露宴やって楽しかったな、やって良かったな、としみじみ、頭に墨付けて字を書いたりとか...

「応援団がいっぱいできたのでは。お父さんの感想は?」  
山崎泰介さん(以下「泰介さん」) 実は披露宴はしてもしなくてもいいと思っていました。形式にこだわることもないし。でも、やってみると結構楽しいものでした。息子の友だちとも会えましたし、普段、話せないことをたくさん聞くことができました。  
はなわさん ふたりの馴れ初めなど、本人からなかなか聞けないので、貴重な場でもありますよ。  
泰介さん 息子の意外な一面を知ることができました。結婚式で初めて知ることがいろいろありました。披露宴がなければ一生知ることがなかったと思います。パンジーをやったり、頭に墨付けて字を書いたりとか...  
はなわさん ユーチューバーなんですか?」  
健さん アピールしようかなと思って...  
泰介さん 式が終わってからは、披露宴やって楽しかったな、やって良かったな、としみじみ、頭に墨付けて字を書いたりとか...

森編集長 金沢など北陸では「花嫁のれん」という、仏間にかけてきれいなれんを花嫁さんがくぐるという風習があります。「花嫁舟」は福岡にありますね。挙式会場に舟で入るといっても美しい風習です。エリアによっては「花嫁行列」という、親、親族、友人の皆さんと一緒に歩く風習もあります。名古屋では「菓子まき」という風習があります。お菓子を披露宴などにまきます。昔の形のままというよりは、今風にアレンジされることも多いです。「花嫁のれん」も自宅ではなく披露宴会場にかけたり、「菓子まき」もマカロンを使ったり、と今風に変化してきました。

「実際に結婚したばかりの山崎さん夫妻は、結婚式の披露宴へのイメージはどうだったか?」  
山崎夏実さん(以下「夏実さん」) 感動、というイメージでした。  
山崎健さん(以下「健さん」) 義務じゃないですけど、結婚する以上はしなくてはいけない、というイメージでした。準備もほぼしてもらって、そこはすごく有り難いな、と思いました。事前には、当日はいっぱいになるんじゃないかな、と思っていましたが、意外と楽しむことができました。  
夏実さん 爆笑に次ぐ爆笑で涙が一滴も出ませんでした(笑)。  
森編集長 良いですね!  
夏実さん 花嫁の手紙の場面では、小田和正



## 爆笑に次ぐ爆笑 涙一滴も出ず 新婦 夏実さん



## 知らない息子の一面を知った 新郎父 泰介さん

やろうか、と言ったんですが、そのときは嫌だったんですね。やっぱりあの時しかなかったと、後悔しています。子どもたちにも絶対に結婚式はあげなきゃダメだ、と言い聞かせています。これから結婚を考えている人にはそういう取り返しのない後悔を絶対にしてほしくないと思います。

森編集長 結婚式をする・しないはカップルのみなさんそれぞれの思いや決意があつてのことだと思つて、どのような選択も間違ひではないと思つていますが、せっかくなら式を挙げてほしいと思つています。結婚式で誓ったことや宣言したことがひとつ大きな支えになりますし、結婚式はふたりにとつてもお互いに知らない一面を知ったり、お互いの友人を知る場なので、より惚れ直す(笑)というかもつとお互いを大事に思うようになった、というご意見を聞くこともあります。

結婚式は、ふたりのこれまでの過去と未来の「つなぎ目」だと感じています。結婚式の準備では人生の振り返りをします。どんな親御さんに育てられて、どんなふうに愛されてきたのか。そこにどんな人たちが関わってきたのか。そこで感謝や有り難さを感じる。結婚式当日は、大好きな人たちが集まっている場で、「ありがとう」という気持ちとふたりの未来への「決意」を伝える。全然違う人生だったふたりが、これからは一緒に歩みます。スタートの場だと思つています。同じ家族でも知らない一面があつたり、絶対普段言えない素直な気持ちがあります。すごく関係性が深まったり、それまで口もろくに聞かなかった親子がしゃべるようになったり。いろんなドラマが結婚式にはあるので、私たちとしては、ぜひ結婚式を挙げてほしいと願っています。

夏実さん そうなんです！ 対価を払ってでもする価値が絶対にあると思います。

森編集長 結婚式はお金がかかると思われがちですが、ご祝儀を頂くので、最終的に自己負担はそこまで高くありません。結婚式のプランを利用してお得に挙式される方も多くいます。海外で挙げられた方も、二次会的に会費制で地元で結婚式をするケースもあります。形はこだわらずにそれぞれの希望や状況に合わせて選べます。

おふたりの式は爆笑に包まれていた、とおっしゃっていましたが、形式的になりすぎず、ふたりがリラックスして行う「自然体」の結婚式が増えています。余興もそこまで盛り込み過ぎずに、ゲストの方と会話を重視するスタイルが人気です。準備も家族や友だちと一緒に作っていくケースも広がっています。

結婚式をするかしないか悩んでいる佐賀のカップルのみなさんに一言!!

泰介さん 今まで生きてきた中で、たくさんの人たちと出会ったと思います。職場でもいろんな人のお世話になっているから、その人たちにお礼をしなくてはいけない。親としても、子どもがどういう人と付き合っているか、結婚式があると分かる。そういう意味では披露宴は必要だと思つています。披露宴がなかったら、息子の一面も、奥さんの育つた環境も分かりませんでした。披露宴は今までふたりが生きてきた全てが分かります。そういう意味で、すごく大事なことだと思つています。

健さん 私たちは同じ歳なんですけど、佐賀市の違う高校に通っていたので、当時は面識が



## 夫婦として生きる覚悟を示せた 新郎 健さん

ありませんでした。でも参列してくれた友人の中には「ちょっと顔を知っている」くらいの人や新郎側にも新婦側にもいて、その人たちが仲良くなつていく。そこで新たなつながりができたことも嬉しかったですね。周りの人たちへの感謝を伝える場でもありますし、覚悟ではないですが、節目というか、やっぱこの日から夫婦として生きていくんだ、という意思表示をすることができました。

はなわさん 中学生の頃、一方的に嫁さんが好きで、2回告白をしてもフラレました。高校卒業後上京して18歳のときに、友人が結婚することになり、佐賀に戻って式に出たら嫁さんがいて。あっ林さん(はなわさんの嫁さんの旧姓)だ!と思つて、会話と一緒に写真を撮つて。当時、携帯なんかないので、写真を送りますよ、と言つて住所を教えもらったところから文通が始まり、遠距離恋愛をして結婚することになりました。

結婚した当時は、東京で芸人として全然芽が出ていないころで経済的に本当に大変だった。嫁さんも「お金がもつたないし、佐賀から東京まで来てもらうのも迷惑だろうし、佐賀にも帰れないし、結婚式は止めよう」と言つてくれたので結婚式をしませませんでした。そのことを今はメチャクチャ後悔しています。結婚式は奥さんが主役になる日。愛する嫁さんが輝いて、みんなに祝福される一回しかないその日を僕は作つてあげられなかった。一般の人はドレスを着て人前に立つことはなかなかないと思つています。自分は芸人としていつもステージの上にいるから、そういうことを分かつていなかった。「佐賀県」が人気になり仕事が軌道に乗つた後に、結婚式を